

# 18 ワイルド作品におけるダンス

## ● ワイルドの生い立ち

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) はアイルランドのダブリンで生まれた。ダブリンのトリニティ・カレッジを卒業した後、1874年オックスフォードのモードリン・カレッジに入学。卒業後は詩人、戯曲家、小説家、童話作家等として多彩な才能を發揮した。戯曲『真面目が肝心』(The Importance of Being Earnest, 1895) 等が上演されて絶頂期を迎えていた1895年、恋人アルフレッド・ダグラス (Alfred Douglas, 1870-1945) の父親クイーンズベリー卿 (Lord Queensberry, 1844-1900) を誹謗罪で告発して敗訴し、反対に当時非合法であった男性間での不品行の罪で逮捕・投獄された。1897年出獄直後にフランスに渡り、1900年に亡くなるまで、イギリスに戻ることはなかった。

## ● ダンスの役割

ワイルド作品でのダンスは、不吉な兆しとなっている。美しい足や艶めかしく旋回する動作が強調された踊りは扇情的であり、登場人物の心を乱して彼らを死や不幸へ誘い込む。童話で小人が踊るダンスは見る者には滑稽であるが、踊り手を残酷な死の運命へと導く。

## ● 7つのヴェールのダンス

『サロメ』(Salomé, 1893) は預言者ヨカナーンが斬首される場面を描いた聖書の挿話をもとにした戯曲である。幽閉されているヨカナーンを手に入れるために、ユダヤの王女サロメが舞うダンスは官能的で、不穏な雰囲気を漂わせている。四分封領主ヘロデは義娘サロメに性的な欲望を抱き、欲望を満たすため彼女に様々な要求をする。サロメはそれらを断り続けるが、恋するヨカナーンを手中にするためヘロデの求めに応じてダンスをする。7つのヴェールと香水を身につけ、サンダルを脱いで踊られるダンスは官能的な側面を持ち、ヘロデは小さな「白い鳩のよう」なサロメの素足を見て歓声を上げ、劣情を満足させる。同時に、このダンスはヨカナーンとサロメの死にもつながっている。サロメが踊ったのは、ヘロデにヨカナーンを斬首させ、その生首を得て口づけするためである。サロメは激しくヨカナーンを求めていたが、拒絶されたためにその首を欲したのである。サロメの死は、ヨカナーンの処刑を望まないヘロデの怒りに触れたことに起因する。ヘロデはダンスの褒美に望むものは何でも与えると約束していたために、サロメ

の要求を拒否できなかったのである。加えて床一面が血まみれであったことも、このダンスの不吉さを示している。サロメを愛し、自殺した若いシリアル人の血が、サロメが裸足で踊る床を覆っていたのである。この血だまりによって忌まわしい雰囲気を加えられたダンスは、直後に殺されるヨカナーンとサロメの死の運命の兆しとなっている。

### ●官能的なダンス

「娼婦の家」(“The Harlot’s House,” 1885) は一組の男女が月明かりの夜に、口論の声や音楽が流れてくる騒々しい娼婦の家の前で立ち止まる場面から始まる。この家の中では、死者たちが踊り回っている。その様子を見ていた女は、男のもとを離れて「淫欲の家」のなかに入ってしまい、外に取り残された男は一人夜明けを迎える。『レディング監獄のバラッド』(The Ballad of Reading Gaol, 1898) では、「娼婦の家」と類似する悪霊たちの旋回するダンスの描写が用いられ、妻殺しの罪で投獄されていた囚人が絞首刑になる前夜に、獄中のワイルドが体験した恐怖が表現されている。

「漁師とその魂」(“The Fisherman and His Soul,” 1891) は、美しい人魚に魅了された漁師が、海に住むために自身の魂を切り取ってしまうという童話である。ダンスが踊られるのは、漁師が魂の切り取り方を妖艶な魔法使いの女から教わるときである。その後無理やり切り取られた魂に待ち受けるのは、体に戻るための異国への放浪の旅という運命である。3年後体に戻るべく魂が漁師を誘惑するときにも、ダンスの描写がある。魂は、ヴェールで顔を覆い、「小さな白い鳩」のような素足で踊る美しい少女がいると言って、陸に上がるよう漁師を唆すのである。漁師はこの話を聞いて強い欲望に襲われ、陸に上がってしまう。その後漁師が海に戻れなくなっている間に、人魚は突然死んでしまう。サロメを彷彿とさせる官能的な少女のダンスは漁師と人魚の別れを生み、人魚の死を導く点において不幸の兆しと言える。

### ●滑稽なダンス

「王女の誕生日」(“The Birthday of the Infanta,” 1891) では、森から連れてこられた醜い小人が、王女の誕生日の見世物として踊りを踊る。王女が大喜びしたのは、その踊りの滑稽さのためだが、小人は王女が自分に好意を持っていると思い込んでしまう。王女を探して城に迷い込んだ小人は、鏡を見て自分の醜さを初めて知り、ショックのあまり死んでしまう。この作品においても、ダンスは登場人物の死の前兆として描かれているのである。

(本間 里美)